

グローバル通信

Ryukoku University

GLOCAL TSUSHIN

2022.03 vol.58

市民のためのお金循環をつくる	1
「みんなで創ろう きらめき湖南」の実現にむけて	1
修士論文・課題研究を書き終えて	2
2021年度修士論文・課題研究題目一覧	2
退職教員からのメッセージ	3
院生の声届けます-2021年度を振り返って-	3
講演会の感想	4
早期履修生の感想	4
事務局インフォメーション	4

春寒もようやくぬるみ、本格的な春の到来を迎えました。みなさまいかがお過ごしでしょうか？

大学院では今年度修了する院生の修士論文・課題研究報告会が行われました。これまでの集大成を、存分に発揮できたのではないのでしょうか。

さて、今回のグローバル通信58号では、修士論文を書き終えた院生の感想、今年度で龍谷大学を退職される先生からのメッセージ、各種講演会の感想などを掲載しています。

早春の息吹を感じる昨今、どうぞ健やかに過ごしてください。



市民のためのお金循環をつくる

新川 達郎

(公益財団法人京都地域創造基金理事長)

私たち公益財団法人京都地域創造基金は、個人であれ団体であれ志のある方々から寄付を集め、それを必要としている方々に届けるという、単純ですが、現実にはハードルの高い活動を進めてきています。寄付をする人は国民の40%以上と推定されるのですが、その平均寄付金額は小さく、GDPの0.3%以下と推計されています。ほとんどのお金は民間営利の市場で回っており、財やサービスの交換に使われているのです。その一方ではこうしたお金を必要としている民間非営利団体あるいは市民社会組織など、営利を目的としない社会的公益的な活動を目指す団体では、概して慢性的に資金不足に悩んでいます。この両者を結び付け、新しいお金の流れをつくる活動が私たちの主たる事業です。

そのために福祉や教育、環境問題など様々な分野に関する基金をつくり、寄付者を開拓してそこにお金を集める工夫をしていますし、お金を必要とする方々を発掘し伴走しながら、少しでも社会課題解決ができるように注力しています。これからの人口減少と高齢化が進む社会では、これまで蓄積してきた財産を活用する方法について多様な選択肢が求められます。その時代にふさわしい活動として遺贈や財産分与を寄付の原資と捉える考え方も一つです。私財の公共的な活かし方を検討いただき、公益目的の寄付を考えてもらう運動を進めているところです。

龍谷大学のみなさまとは、これまでにも様々な協力関係を築かせていただきました。株式会社PLUS SOCIALを始めとして資金循環や事業開発など社会的に意義のある活動での連携協力は枚挙にいとまがありません。そして地域公共人材総合研究プログラムでは、相互の連携によって、学びの場を提供させていただくとともに、私たちのスタッフが貴重な学びの機会をいただいております。私たちの本業において当面する問題について研究の場であらえ直す機会をいただき、課題解決に向けての多くの糸口を見出しています。今後とも一層の連携協力の深化が多面的に実現できればと考えております。

「みんなで創ろう きらめき湖南」の実現にむけて

生田 邦夫

(湖南市長)



湖南市は滋賀県南部に位置し、南端に阿星山系を、北端に岩根山系を望み、地域の中央を野洲川が流れています。水と緑に囲まれた自然環境に恵まれた地域で、総面積は70.40km²で、人口は約54,000人の市です。

本地域は古くは近江と伊勢を結ぶ伊勢参宮街道として栄え、江戸時代には東海道五十三次の51番目の石部宿が置かれ、街道を中心とした産業や文化が栄えました。名神高速道路の開通に伴い、栗東および竜王インターチェンジ等に近接する有利な立地条件を利用して県内最大の湖南工業団地が造成されたことを契機に、人口が急激に増えました。近年では外国人住民が多く居住され、県内で最も高い外国人住民の構成率となり、多文化共生のまちづくりにも積極的に取り組んできました。しかし少子高齢化や都市部への人口流出による人口の減少が少しずつ進み、2060年には約38,000人にもまで減少することが見込まれ人口減少の抑制のための取組が求められております。そのような中で2020年7月に、内閣総理大臣から「SDGs未来都市」の認定を受け、自治体新電力を核とした官民連携の自然エネルギー導入プロジェクト「湖南市版シュタットベルケ構想」を展開し、地域の活力を創出し、未来を創造するさりげない支えあいのまちづくりの実現とSDGsへの貢献に取り組むこと等魅力のあるまちづくりを推進しております。今後ますます地方自治体は限られた財源で新しい時代に対応した行政サービスを求められ、職員は、様々な課題の解決策を考え、それを実行に移す行動力が必要となってきてます。

貴大学の地域公共人材総合研究プログラムは、私たちにとりましても人材育成の絶好の機会として本当にありがたく参加させていただいており感謝を申し上げますとともに、ここで学んだことが、実践できる環境を整えていきたいと考えております。

今後も、貴学との人材育成や様々な分野で連携を図りながら、「ずっとここ暮らしたい!みんなで創ろう きらめき湖南」の実現に向け邁進してまいりますので、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

修士論文・課題研究を書き終えて



修士論文を書き終え

向井 直文

政策学研究科修士課程1年

修士論文の研究を通して感じたことは、自分の論文テーマと関係が薄そうに感じる講義であっても、そこで起こる議論の中には様々なヒントとなる知識や考え方など出会うことがたくさんあるということです。論文は自分の中にある考えを、様々な既往研究を組み合わせて説明する必要がありますのでとても助かりました。本当に楽しい時間でした。

また論文に関するやりとりは、ほぼ全て録音をして、出勤退勤の合間に何度も聞いて確認をしていました。毎回聞いたたびに、自分の考えが頭の中で整理できると、新しい発見があるので、気がつけば毎朝のルーティンとなるほどでした。

社会人のため「時間が作れないなり工夫が必要だな」とつくづく思い知らされました。



チーム政策を担うもの

黒田 哲夫

政策学研究科修士課程1年

大学院で学ぶ決意をした社会人には、理由と覚悟がありました。皆、それと常に向き合ってきました。家庭と仕事、自らの健康を犠牲にする日々だったと思います。研究テーマはその人の生き様でした。普遍的な真理の探究には及ばなかったにせよ、一年間の“修行”を心から楽しみ、自らを脱構築できたはずでした。

大学院に残り研究に向き合う院生には、自らに課した旅の終着点を目指し、そして、いつの日かそこで見えた景色の話をして欲しい、そう願っています。

熱心に修論指導して下さい、講義では素晴らしい知見を惜しげもなくご教示いただいた先生方、辛い時に温かい言葉をかけて下さった院生の皆さん、そして家族に、心からの感謝を申し上げます。



課題研究を書き終えて

福原 次信

経営学研究科修士課程2年

課題研究論文は、「経営を維持し発展させる視点からのテレワーク研究-小規模デザイン会社の事例から-」というテーマで自社の1年9ヶ月のテレワーク実践を検証し、テレワークを働き方の面からのみ捉えるのではなく、経営者の視点に立ってテレワークを考察し、執筆したのが本論文です。

それは、次のような理由によるものです。経営者には、経営を維持し発展させる責任があるということです。新規顧客の開拓、新製品の開発、新技術の取得や人材の育成といった経営課題を掲げ、持続的な仕事の確保のための取り組みが要求されます。こうした取り組みには、経営計画をつくり、その浸透を社員に働きかけ、社員の貢献意欲を引き出し、実践していく活動が必要となります。本論文では、テレワークという仕組みの中で、このような経営課題の実践に、どのような課題が生じているのかを明らかにしています。論文執筆では、論文構成をできるだけ詳細に設計することが重要です。指導教官の細川先生には、このことを何度もご教示いただきました。そして政策学部の社会人院生の卒論執筆の体験を目の当たりにしてきたことが大変役に立っていることも感謝の意を込めてお伝えします。

2021年度 修士論文・課題研究 題目一覧

No.	氏名	研究科	区分	修士論文・課題研究 題目
1	李 文軒	政策学研究科	修士論文	日本古紙リサイクルシステムへの考察および輸出現状研究
2	青木 滉人	政策学研究科	修士論文	新しい地域コミュニティの形成・運営における課題と展望 京丹後市宇川地域を事例として
3	内海 ありさ	政策学研究科	修士論文	京都市の住宅政策における住宅供給公社の役割に関する研究-京都市住宅供給公社の展開した事業に着目して-
4	木下 太朗	政策学研究科	修士論文	京都市洛西ニュータウン地域へのバス高速輸送システム(BRT)導入におけるフィージビリティスタディ
5	西田 駿吾	政策学研究科	修士論文	京都府京丹後市大宮町三重・森本地区と龍谷大学政策学部の域学連携事業に関する研究
6	堀 聡	政策学研究科	修士論文	若年労働者の安定的雇用に必要な政策の考察-生活給付に着目して-
7	黄 天媛	政策学研究科	修士論文	中小企業の労働CSRと外国人労働者の職場定着との関係性に関する一考察-在日中国人労働者を中心に-
8	李 朋朋	政策学研究科	修士論文	中国におけるナンバー規制の大気汚染・交通渋滞に対応する低減効果に関する研究-鄭州市を例として-
9	浅香 需	政策学研究科	修士論文	過疎地における地域資源を活かす起業家の役割-京都府相楽郡笠置町を事例として-
10	勇 元気	政策学研究科	修士論文	Public Service Motivationと内発的モチベーションがパフォーマンスへ与える影響について-中核市職員を事例に-
11	黒田 哲夫	政策学研究科	修士論文	共創のまちづくりによる新旧市民の融合と市民性の涵養-八尾市校区まちづくり協議会を事例として-
12	坂本 未希	政策学研究科	修士論文	DV被害者支援の現状と課題-公的支援の領域を中心に-
13	渋谷 育美	政策学研究科	修士論文	大学生と連携した地域における高齢者支援の検討-コロナ対応を契機としたICT活用を中心に-
14	砂野 信	政策学研究科	修士論文	趣味活動を社会参画へ繋げるサードプレイスの形成-そば打ち愛好家団体「全麵協」の変遷を事例に-
15	多和田 美和	政策学研究科	修士論文	温室効果ガス排出量実質ゼロに向けた下水バイオマスエネルギー政策-消化ガス有効利用政策の現状と課題-
16	中村 雅彦	政策学研究科	修士論文	企業が機会を活かす行動につながる地方自治体の産業政策に関する考察-京都府城陽市の事例を中心に-
17	向井 直文	政策学研究科	修士論文	コミュニティを支えるキーパーソン-大阪府地域活動協議会を通して見えたコミュニティバランサーという考え方-
18	森井 直	政策学研究科	修士論文	民間団体による里山保全活動と人材確保に関する考察-大阪府内のNPO法人・森林ボランティア団体へのヒアリング・アンケート調査をもとに-
19	福原 次信	経営学研究科	修士論文	経営を維持し発展させる視点からのテレワーク研究-小規模デザイン会社の事例から-
20	伴野 元哉	法学研究科	修士論文	不法行為法における規範形成の意義-自己決定権をめぐる裁判例を通して-
21	由里 悦子	法学研究科	修士論文	精神疾患の労災保険給付の意義と課題についての一考察-「心理的負荷による精神障害の認定基準」の改正を背景として-



政策学研究科の成果と将来への期待

2011年の政策学部発足と同時に開設された政策学研究科も早10年を超える歳月を刻んできました。この間、多くの院生が修了され社会の各分野で活躍されており、研究科の教員として嬉しい限りです。

ところで、研究科の教育理念・目的は、市民的思考力と、協働による政策研究・立案実施能力を持った人材の養成とされています。キーワードは、地域に目線を置いた「市民」「協働」「政策立案実施能力」です。私は自分なりに、市民の権利の擁護と拡大のため、行政、企業、市民が枠を超え政策課題解決のため、ともに考え実践していくことであると解釈しています。地域公共政策士は資格の面からこの理念を具現化したものと言えるでしょう。私ごとになりますが、23年間の京都府庁での公務員生活で最後に担当した仕事は環境行政、とりわけ地球温暖化対策でしたが、本研究科の理念はまさにこの地球温暖化対策の基本的スタンスと一致するものでした。当時、温暖化防止の啓発のために都道府県地球温暖化防止活動推進センターの設置がされることとなり、NPO法人も認定の対象とされるよう環境省に要望したことや、2000年4月のアースディの際に、気候ネットワークをはじめとしたNPO、京都府、京都市、中小企業の経営者の方が一つになって業務を分担し、自転車パレードなどを実現したことが懐かしく思い出されます。

私は2002年に本学法学部に職を得て研究、教育に携わってきました。2011年の研究科発足からは、「環境政策研究」「修士論文指導」を担当しましたが、さらに2016年度から退任された大矢野先生の後を引き継いで「フィールドワーク特別研究」を担当し、地域公共人材総合研究プログラムの社会人院生と意見交換、議論させていただきました。また、「地域リーダーシップ研究」も何回か担当し一線で活躍する地域リーダーを交えて熱い議論を展開しました。まさに「教えることは教えられること」であり、院生からも多くの新しいことを学ぶことができました。

今後の社会を展望するとき、気候変動の進行、災害リスクの増加、新たな感染症の蔓延など予期せざる事態の頻発が予想されます。また、人口減少、過疎化、児童虐待、ジェンター、インフラ設備の老朽化など日本社会をめぐる政策課題は山積しています。院生・修了生の皆さんは本研究科で培われた思考の柔軟性やコーディネート能力を存分に発揮され、課題解決に向けてご活躍されることを祈念します。

結びに、研究科でご一緒できたすべての院生・修了生をはじめ協定先の関係機関の皆様にも心より感謝申し上げますとともに、研究科、地域公共人材総合研究プログラムのますますのご発展と関係者のネットワークの一層の拡大を期待し、退職にあたってのごあいさつとさせていただきます。



北川 秀樹

(龍谷大学政策学部教授)

院生の声届けますー 2021 年度を振り返ってー

足早に過ぎていった1年間を振り返って

杉山 和則

政策学研究科修士課程1年

2021年度を振り返ると、まだまだコロナ禍が続く状況でしたが、新しい経験が豊富にできた濃密な1年間だったと思います。特に学部から進学した私にとって、人生の大先輩であるはずの社会人院生の方々と講義で同じ立場から議論ができたり、講義中や共同研究室で現場での経験やそれに基づくアドバイス、資料作成の方法を教えて頂いたりした時間は大学院に進学してからこそ経験できた時間でした。また、先生方や学部から進学した院生同士でも、大学生時代とは違ったより深い議論や会話をすることができました。

入学前に抱いた大学院生活の想像では、自身の研究や就活などで精一杯になるのかなどの不安?もあったのですが、こうした他者との関わりのなかで新たな経験が積めたことは嬉しい限りです。

2022年度は修士課程最後の1年間となるので、年齢や所属等に関わらず議論や研究ができる大学院の環境を大切に、修士論文の完成に向けて邁進していきたいと思います。

講義外でも深い交流が生まれる

勇 元気

政策学研究科修士課程1年

多様なセクターで活躍する同志と強い絆で結ばれたことが最も大きな財産であり、ディスカッションの多い授業において多様な視点を学び、身の程を知る1年間でした。オンライン授業では、スライドを活用したわかりやすい講義を受けられ、受講者の顔が良く見え、対面とは違った良さを感じました。授業の延長にオンライン飲み会を行うこともありましたが、急な開催でも参加しやすいため多くの方が参加し、距離がグッと近くなりました。対面授業では、授業中は勿論、事前事後にまで学びに関する話題で盛り上がり、こんなに貴重な時間は二度とないと感じました。しかし、この1年間はあっという間で、課題や論文に追われる日々には交流を疎かにしてしまう時期や私ごときがと発言を控えてしまうこともありましたが、今振り返ればなんて勿体ないことをしていたのだらうと後悔しています。そのため、これから学びに来られる皆様には、授業への積極的な姿勢は勿論、同志との対話をしっかり楽しんでほしいと思います。最後に、世間は広く、社会課題に取り組み、生きがいとしている凄い方がたくさんいます。その取り組みを多様な視点で捉え、学び、自身もこれから地域公共人材として1人でも多くの人を動機づけ、1人でも多くの同志と出会い、切磋琢磨したいと強く思っています。

講演会の感想

地域リーダーシップ研究講演会

講師：山田健一郎（公益財団法人佐賀未来創造基金 代表理事）

テーマ：「地域におけるコミュニティ財団」～佐賀未来創造基金の事例～



政策学研究科修士課程 1年 **小坂 義**

12月4日(土)に公益財団法人佐賀未来創造基金の山田代表理事のご講演を拝聴しました。

山田代表理事は、スポーツマンでありながら優しい雰囲気がある方だと思いました。お話が進むうちに、山田代表理事の心に秘めた熱い思いがひしひしと伝わるご講演でした。佐賀未来創造基金の事業は、常に新たなことへの挑戦で、取り組むことへのやりがいや、ご苦労も感じながら伺いました。

私もNPO法人に所属しており、寄付が活動への応援になること、サポートをすることの大切さ、そして「NPOは当事者の代弁者」という言葉にNPOの役割の重要性を感じました。NPO法人として、また中間支援の立場として、市民活動や地域活動に取り組まれている皆様のサポート並びに当事者の代弁者となれるように心を新たにしました。ありがとうございました。

先進的地域政策研究を受講して

政策学研究科修士課程 1年 **中菌 昭彦**

この科目は、ゲスト講師から地域政策の先進事例の話をお聴きして、その後講師と受講生とで質疑応答するものです。シラバスに是非とも履修してほしいと書かれていたので、私も期待して受講しましたが、内容は予想を更に大きく上回るものでした。

3人の講師のお話は、1つ目は熊本県の農材部で子ども記者クラブや地域課題解決に向けた会社経営を子ども中心で行うものであり、2つ目は大阪市の臨海部で区役所と地元組織がタイアップしたイベントや賑わい空間整備等の事業であり、3つ目は京都市の中心市街地で市役所が地元を巻き込んで空き家の再生と密集市街地の環境改善を行うもので、地域性もテーマも多彩で活動内容も初めて耳にするユニークなものばかりでした。ディスカッションでは、実務者としての本音が聞くことができ大きな刺激を受けました。講師の皆さんの明るく前向きで回りを巻き込む姿勢は、私自身見習いたいと思います。

早期履修生の感想

政策学部 4年 **伊藤 悠希**

大学院科目を履修して、改めて「学んで面白いな」と率直に感じています。どの授業でも自分の知らなかったこと知れたこと、学びに貪欲な他の院生と共に勉強できたことを本当にありがたい機会だったと感じています。

1番最初に面白いと思ったのは、『地域協働研究』で受講生が持ってきた発表を元に議論するタイミングです。ふと気になった疑問を投げかけると、様々な経歴をもった社会人院生からの様々な答えが返ってきた時は、ある種の感動を覚えました。1つの質問でも、回答者のバックボーンが違えば全く違う回答になっていて、政策学的な面白さが感じられました。

大学院科目を履修してからは、実際に地域で何か活動するときにも講義内容を意識することや、反対に活動を授業の議題に持っていくことを意識することで、日常においても「学びのアンテナ」が強くなったように思います。これからの院生生活に向けた有意義なスタートだと思っています。

事務局インフォメーション

●学位授与式

日 時：2022年3月19日(土)10:30～

場 所：龍谷大学深草学舎顕真館

●入学式

日 時：2022年4月1日(金)15:30～

場 所：龍谷大学深草学舎体育館

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター 『グローバル通信』 通巻58号 2022年3月

発 行 / 龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム H P / http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/

連絡先/ 政策学部教務課 編 集 / 木下太郎、杉山和則、田中智朗

TEL:075-645-2285 FAX:075-645-2101 編集補助 / 今井航平、長友吟示、田中博之

監 修 / グローバル通信編集委員会